

upL^AT_EX 2_ε について

中野 賢 & 日本語 T_EX 開発コミュニティ & TTK

作成日：2018/04/08

注意：

この文書は、「コミュニティ版 pL^AT_EX 2_ε」をベースに upT_EX 向けの調整を加えた、「コミュニティ版 upL^AT_EX 2_ε」の付属文書です。

アスキー pT_EX は、高品質の日本語組版ソフトウェアとしてデファクトスタンダードの地位にあるといえます。しかし、pT_EX には

- 直接使える文字集合が原則的に JIS X 0208（JIS 第 1,2 水準）の範囲に限定されていること、
- 8bit の非英語欧文との親和性が高いとは言えないこと、
- pT_EX の利用が日本語に限られ、中国語・韓国語との混植への利用が進んでいないこと

といった弱点がありました。

これらの弱点を克服するため、pT_EX の内部コードを Unicode 化した拡張版が upT_EX です。また、upT_EX 上で用いる Unicode 版 pL^AT_EX が upL^AT_EX です¹。現在の upL^AT_EX は、日本語 T_EX 開発コミュニティが配布しているコミュニティ版 pL^AT_EX² をベースにしています。開発中の版は pL^AT_EX と同様に、GitHub のリポジトリ³で管理しています。upL^AT_EX はアスキーとは無関係ですので、バグレポートはアスキー宛てではなく、日本語 T_EX 開発コミュニティに報告してください。T_EX Forum や GitHub の Issue システムが利用できます。

¹<http://www.t-lab.opal.ne.jp/tex/uptex.html>

²<https://github.com/texjporg/platex>

³<https://github.com/texjporg/uplatex>

1 この文書について

この文書は $\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ の概要を示していますが、使い方のガイドではありません。ほとんどの機能は元となっている $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ や $\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ と同等ですので、それぞれの付属文書などを参照してください。

$\text{up}\text{T}\text{E}\text{X}$ については公式ウェブサイトあるいは [1] (英語) を参照してください。この文書の構成は次のようになっています。

第 1 節 この節です。この文書についての概要を述べています。

第 2 節 $\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ で拡張した機能についての概要です。付属のクラスファイルやパッケージファイルについても簡単に説明しています。

第 3 節 現在のバージョンの $\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$ と旧バージョン、あるいは元となっている $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$ / $\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$ との互換性について述べています。

付録 A この文書ソース (`uplatex.dtx`) の `DOCSTRIP` のためのオプションについて述べています。

付録 B $\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ の `dtx` ファイルをまとめて、一つのソースコード説明書にするための文書ファイルの説明をしています。

付録 C 付録 B で説明した文書ファイルを処理する `sh` スクリプト (手順) などについて説明しています。

2 $\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ の機能について

$\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ が提供するファイルは、次の 3 種類に分類することができます。この構成は $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ と同様です。

- フォーマットファイル
- クラスファイル
- パッケージファイル

2.1 フォーマットファイル

$\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$ のフォーマットファイルを作成するには、ソースファイル “`uplatex.ltx`” を $\epsilon\text{-up}\text{T}\text{E}\text{X}$ の `INI` モードで処理します⁴。ただし、 $\text{T}\text{E}\text{X Live}$ や $\text{W32}\text{T}\text{E}\text{X}$ ではこの処

⁴2016 年以前は $\text{up}\text{T}\text{E}\text{X}$ と $\epsilon\text{-up}\text{T}\text{E}\text{X}$ のどちらでもフォーマットを作成することができましたが、2017 年に $\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$ が $\epsilon\text{-T}\text{E}\text{X}$ 必須となったことに伴い、 $\text{up}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$ も $\epsilon\text{-up}\text{T}\text{E}\text{X}$ が必須となりました。

理を簡単にする `fmtutil-sys` あるいは `fmtutil` というプログラムが用意されています。以下を実行すれば、フォーマットファイル `uplatex.fmt` が作成されます。

```
fmtutil-sys --byfmt uplatex
```

次のリストが、`uplatex.ltx` の内容です。ただし、このバージョンでは、 \LaTeX から $\text{up}\mathcal{\LaTeX}$ への拡張を `plcore.ltx` ($\text{p}\mathcal{\LaTeX}$ によって提供される) および `uplcore.ltx` をロードすることで行ない、`latex.ltx` には直接、手を加えないようにしています。したがって `uplatex.ltx` はとても短いものとなっています。`latex.ltx` には \LaTeX のコマンドが、`uplcore.ltx` には $\text{up}\mathcal{\LaTeX}$ で拡張したコマンドが定義されています。

```
1 <plcore>
```

`latex.ltx` の末尾で使われている `\dump` をいったん無効化します。

```
2 \let\orgdump\dump
3 \let\dump\relax
```

`latex.ltx` を読み込みます。 \TeX Live の標準的インストールでは、この中で Babel 由来のハイフネーション・パターン `hyphen.cfg` が読み込まれるはずですが、

```
4 \input latex.ltx
```

`plcore.ltx` と `uplcore.ltx` を読み込みます。

```
5 \typeout{*****^J%
6      *^J%
7      * making upLaTeX format^J%
8      *^J%
9      *****}
10 \makeatletter
11 \input plcore.ltx
12 \input uplcore.ltx
```

フォント関連のデフォルト設定ファイルである、`upldefs.ltx` を読み込みます。 \TeX の入力ファイル検索パスに設定されているディレクトリに `upldefs.cfg` ファイルがある場合は、そのファイルを使います。

```
13 \InputIfFileExists{upldefs.cfg}
14     {\typeout{*****^J%
15          * Local config file upldefs.cfg used^J%
16          *****}%
17     {\input{upldefs.ltx}}}
```

以前のバージョンでは、フォーマット作成時に $\text{up}\mathcal{\LaTeX}$ のバージョンがわかるように、端末に表示していましたが、`\everyjob` にバナー表示以外のコードが含まれる可能性を考慮し、安全のためやめました。

```
18 %\the\everyjob
```

$\text{up}\mathcal{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ の起動時に `uplatex.cfg` がある場合、それを読み込むようにします ($\text{p}\mathcal{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ が `platex.cfg` を読み込むのと同様)。バージョン 2016/07/01 ではコードを `uplcore.ltx` に入れていましたが、`uplatex.ltx` へ移動しました。

```

19 \everyjob\expandafter{%
20   \the\everyjob
21   \IfFileExists{uplatex.cfg}{%
22     \typeout{*****^~J%
23       * Loading uplatex.cfg.^~J%
24       *****}%
25   \input{uplatex.cfg}}{%
26 }

```

フォーマットファイルにダンプします。

```

27 \let\dump\orgdump
28 \let\orgdump\@undefined
29 \makeatother
30 \dump
31 %\endinput
32 </plcore>

```

実際に $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2_{\epsilon}}$ への拡張を行なっている `uplcore.ltx` は、DOCSTRIP プログラムによって、次のファイルの断片が連結されたものです。

- `uplvers.dtx` は、 $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2_{\epsilon}}$ のフォーマットバージョンを定義しています。

また、プリロードフォントや組版パラメータなどのデフォルト設定は、`uplatex.ltx` の中で `upldefs.ltx` をロードすることにより行います⁵。このファイル `upldefs.ltx` も `uplfonts.dtx` から生成されます。

注意：

このファイルに記述されている設定を変更すれば $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2_{\epsilon}}$ をカスタマイズすることができますが、その場合は `upldefs.ltx` を直接修正するのではなく、いったん `upldefs.cfg` という名前でコピーして、そのファイルを編集してください。フォーマット作成時に `upldefs.cfg` が存在した場合は、そちらが `upldefs.ltx` の代わりに読み込まれます。

ここまで見てきたように、 $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ の各ファイルはそれぞれ $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ での対応するファイル名の頭に “u” を付けた名前になっています。

2.1.1 バージョン

$\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2_{\epsilon}}$ のバージョンやフォーマットファイル名は、`uplvers.dtx` で定義しています。これは、 $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2_{\epsilon}}$ のバージョンやフォーマットファイル名が `plvers.dtx` で定義されているのと同じです。

⁵旧版では `uplcore.ltx` の中でロードしていましたが、2018 年以降の新しいコミュニティ版 $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ では `uplatex.ltx` から読み込むことにしました。

2.1.2 NFSS2 コマンド

upL^AT_EX 2_ε は pL^AT_EX 2_ε と共通の `plcore.ltx` を使用していますので、NFSS2 の和文フォント選択への拡張が有効になっています。

2.1.3 出ルーチンとフロート

upL^AT_EX 2_ε は pL^AT_EX 2_ε と共通の `plcore.ltx` を使用していますので、出力ルーチンや脚注マクロなどは pL^AT_EX 2_ε と同じように動作します。

2.2 クラスファイルとパッケージファイル

upL^AT_EX 2_ε が提供をするクラスファイルやパッケージファイルは、pL^AT_EX 2_ε に含まれるファイルを基にしています。

upL^AT_EX 2_ε に付属のクラスファイルは、次のとおりです。

- `ujarticle.cls`, `ujbook.cls`, `ujreport.cls`

横組用の標準クラスファイル。`ujclasses.dtx` から作成される。それぞれ `jarticle.cls`, `jbook.cls`, `jreport.cls` の upL^AT_EX 版。

- `utarticle.cls`, `utbook.cls`, `utreport.cls`

縦組用の標準クラスファイル。`ujclasses.dtx` から作成される。それぞれ `tarticle.cls`, `tbook.cls`, `treport.cls` の upL^AT_EX 版。

なお `jltxdoc.cls` の upL^AT_EX 版はありませんが、これは pL^AT_EX のものが upL^AT_EX でもそのまま使えます。

また、upL^AT_EX 2_ε に付属のパッケージファイルは、次のとおりです。

- `uptrace.sty`

`ptrace.sty` の upL^AT_EX 版。L^AT_EX でフォント選択コマンドのトレースに使う `tracefnt.sty` が再定義してしまう NFSS2 コマンドを、upL^AT_EX 2_ε 用に再々定義するためのパッケージ。`uplfonts.dtx` から作成される。

他の pL^AT_EX のパッケージは、upL^AT_EX でもそのまま動作します。

3 他のフォーマット・旧バージョンとの互換性

ここでは、この upL^AT_EX 2_ε のバージョンと以前のバージョン、あるいは pL^AT_EX 2_ε/L^AT_EX 2_ε との互換性について説明をしています。

3.1 p \LaTeX 2 ϵ および \LaTeX 2 ϵ との互換性

up \LaTeX 2 ϵ は、p \LaTeX 2 ϵ の上位互換という形を取っていますので、クラスファイルやいくつかのコマンドを置き換えるだけで、たいていの p \LaTeX 2 ϵ 文書を簡単に up \LaTeX 2 ϵ 文書に変更することができます。ただし、up \LaTeX 2 ϵ のデフォルトの日本語フォントメトリックは p \LaTeX 2 ϵ のそれと異なりますので、レイアウトが変化することがあります。また、 \LaTeX 2 ϵ のいくつかの命令の定義も変更していますので、 \LaTeX 2 ϵ で処理できるファイルを up \LaTeX 2 ϵ で処理した場合に完全に同じ結果になるとは限りません。

また、up \LaTeX 2 ϵ は新しいマクロパッケージですので、2.09 互換モードをサポートしていません。 \LaTeX 2 ϵ の仕様に従ってドキュメントを作成してください。

p \LaTeX 2 ϵ 向けあるいは \LaTeX 2 ϵ 向けに作られた多くのクラスファイルやパッケージファイルはそのまま使えると思います。ただし、例えばクラスファイルが p \LaTeX 標準の漢字エンコーディング (JY1, JT1) を前提としている場合は、up \LaTeX で採用した漢字エンコーディング (JY2, JT2) と合致せずにエラーが発生してしまいます。この場合は、そのクラスファイルが up \LaTeX に対応していないことになります。このような場合は、p \LaTeX を使い続けるか、その作者に連絡して up \LaTeX に対応してもらうなどの対応をとってください。

3.2 latexrelease パッケージへの対応

\LaTeX <2015/01/01>で導入された latexrelease パッケージをもとに、新しい p \LaTeX では platexrelease パッケージが用意されました。本来は up \LaTeX でも同様のパッケージを用意するのがよいのですが、現在は p \LaTeX から up \LaTeX への変更点が含まれていませんので、幸い platexrelease パッケージをそのまま用いることができます。このため、up \LaTeX で独自のパッケージを用意することはしていません。platexrelease パッケージを用いると、過去の up \LaTeX をエミュレートしたり、フォーマットを作り直すことなく新しい up \LaTeX を試したりすることができます。詳細は platexrelease のドキュメントを参照してください。

A DOCSTRIP プログラムのためのオプション

この文書のソース (uplatex.dtx) を DOCSTRIP プログラムで処理することによって、いくつかの異なるファイルを生成することができます。DOCSTRIP プログラムの詳細は、docstrip.dtx を参照してください。

この文書の DOCSTRIP プログラムのためのオプションは、次のとおりです。

オプション	意味
plcore	フォーマットファイルを作るためのファイルを生成
pldoc	upL ^A T _ε X のソースファイルをまとめて組版するための文書ファイル (upldoc.tex) を生成
shprog	上記のファイルを作成するための sh スクリプトを生成
Xins	上記の sh スクリプトや perl スクリプトを取り出すための DOCSTRIP バッチファイル (Xins.ins) を生成

B 文書ファイル

ここでは、このパッケージに含まれている dtx ファイルをまとめて組版し、ソースコード説明書を得るための文書ファイル `upldoc.tex` について説明をしています。個別に処理した場合と異なり、変更履歴や索引も付きます。

デフォルトではソースコードの説明が日本語で書かれます。もし英語の説明書を読みたい場合は、

```
\newif\ifJAPANESE
```

という内容の `uplatex.cfg` を予め用意してから `upldoc.tex` を処理してください (2016 年 7 月 1 日以降の upL^AT_εX が必要)。

コードは pL^AT_εX のものと (ファイル名を除き) ほぼ同一なので、ここでは違っている部分だけ説明します。

```
33 \*pldoc)
34 \begin{filecontents}{upldoc.dic}
35 西暦      せいれき
36 和暦      われき
37 \end{filecontents}
```

pL^AT_εX のドキュメントでは、`plext.dtx` の中で組み立てるサンプルのために `plext` パッケージが必要ですが、upL^AT_εX のファイルにはそのようなサンプルが含まれないので除外しています。

```
38 \documentclass{jltxdoc}
39 %\usepackage{plext} %% comment out for upLaTeX
40 \listfiles
41
42 \DoNotIndex{\def,\long,\edef,\xdef,\gdef,\let,\global}
43 \DoNotIndex{\if,\ifnum,\ifdim,\ifcat,\ifmmode,\ifvmode,\ifhmode,%
44             \iftrue,\iffalse,\ifvoid,\ifx,\ifeof,\ifcase,\else,\fi}
45 \DoNotIndex{\box,\copy,\setbox,\unvbox,\unhbox,\hbox,%
46             \vbox,\vtop,\vcenter}
47 \DoNotIndex{\@empty,\immediate,\write}
48 \DoNotIndex{\egroup,\bgroup,\expandafter,\begingroup,\endgroup}
```

```

49 \DoNotIndex{\divide,\advance,\multiply,\count,\dimen}
50 \DoNotIndex{\relax,\space,\string}
51 \DoNotIndex{\csname,\endcsname,\@spaces,\openin,\openout,%,
52             \closein,\closeout}
53 \DoNotIndex{\catcode,\endinput}
54 \DoNotIndex{\jobname,\message,\read,\the,\m@ne,\noexpand}
55 \DoNotIndex{\hsize,\vsize,\hskip,\vskip,\kern,\hfil,\hfill,\hss,\vss,\unskip}
56 \DoNotIndex{\m@ne,\z@,\z@skip,\@ne,\tw@,\p@,\@minus,\@plus}
57 \DoNotIndex{\dp,\wd,\ht,\setlength,\addtolength}
58 \DoNotIndex{\newcommand,\renewcommand}
59
60 \ifJAPANESE
61 \IndexPrologue{\part*{索引}}%
62             \markboth{索引}{索引}%
63             \addcontentsline{toc}{part}{索引}%
64 イタリアック体の数字は、その項目が説明されているページを示しています。
65 下線の引かれた数字は、定義されているページを示しています。
66 その他の数字は、その項目が使われているページを示しています。}
67 \else
68 \IndexPrologue{\part*{Index}}%
69             \markboth{Index}{Index}%
70             \addcontentsline{toc}{part}{Index}%
71 The italic numbers denote the pages where the corresponding entry
72 is described, numbers underlined point to the definition,
73 all others indicate the places where it is used.}
74 \fi
75 %
76 \ifJAPANESE
77 \GlossaryPrologue{\part*{変更履歴}}%
78             \markboth{変更履歴}{変更履歴}%
79             \addcontentsline{toc}{part}{変更履歴}}
80 \else
81 \GlossaryPrologue{\part*{Change History}}%
82             \markboth{Change History}{Change History}%
83             \addcontentsline{toc}{part}{Change History}}
84 \fi
85
86 \makeatletter
87 \def\changes@#1#2#3{%
88   \let\protect\@unexpandable@protect
89   \edef\@tempa{\noexpand\glossary{#2\space\currentfile\space#1\levelchar
90     \ifx\saved@macroname\@empty
91       \space\actualchar\generalname
92     \else
93       \expandafter\@gobble
94       \saved@macroname\actualchar
95       \string\verb\quotechar*%
96       \verbatimchar\saved@macroname
97       \verbatimchar
98     \fi

```



```

99             :\levelchar #3}}%
100 \@tempa\endgroup\@esphack}
101 \makeatother
102 \RecordChanges
103 \CodelineIndex
104 \EnableCrossrefs
105 \setcounter{IndexColumns}{2}
106 \settowidth\MacroIndent{\ttfamily\scriptsize 000\ }

    ここからが本文ページとなります。

107 \begin{document}
108 \title{The \upLaTeXe\ Sources}
109 \author{Ken Nakano \& Japanese \TeX\ Development Community \& TTK}
110
111 % Get the date and patch level from uplvers.dtx
112 \makeatletter
113 \let\patchdate=\@empty
114 \begingroup
115   \def\ProvidesFile#1[#2 #3]#4\def\uppatch@level#5{%
116     \date{#2}\xdef\patchdate{#5}\endinput}
117   \input{uplvers.dtx}
118 \endgroup
119
120 % Add the patch version if available.
121 \def\Xpatch{}
122 \ifx\patchdate\Xpatch\else
123   \edef\@date{\@date\space version \patchdate}
124 \fi
125 \makeatother
126
127 \pagenumbering{roman}
128 \maketitle
129 \renewcommand\maketitle{}
130 \tableofcontents
131 \clearpage
132 \pagenumbering{arabic}
133
134 \DocInclude{uplvers} % upLaTeX version
135
136 \DocInclude{uplfonts} % NFSS2 commands
137
138 \DocInclude{ukinsoku} % kinsoku parameter
139
140 \DocInclude{ujclasses} % Standard class
141
142 \StopEventually{\end{document}}
143
144 \clearpage
145 \pagestyle{headings}
146 % Make TeX shut up.

```

```

147 \hbadness=10000
148 \newcount\hbadness
149 \hfuzz=\maxdimen
150 %
151 \PrintChanges
152 \clearpage
153 %
154 \begingroup
155   \def\endash{--}
156   \catcode'\- \active
157   \def-{\futurelet\temp\indexdash}
158   \def\indexdash{\ifx\temp-\endash\fi}
159
160   \PrintIndex
161 \endgroup
162 \let\PrintChanges\relax
163 \let\PrintIndex\relax
164 \end{document}
165 \end{pdoc}

```

C おまけプログラム

C.1 シェルスクリプト mkpdoc.sh

upL^AT_EX 2_ε のマクロ定義ファイルをまとめて組版し、変更履歴と索引も付けるときに便利なシェルスクリプトです。このシェルスクリプトの使用法は次のとおりです。

```
sh mkpdoc.sh
```

コードは pL^AT_EX 2_ε のものと（ファイル名を除き）ほぼ同一なので、ここでは違う部分だけ説明します。

```

166 {*shprog}
167 {ja}rm -f upldoc.toc upldoc.idx upldoc.glo
168 {en}rm -f upldoc-en.toc upldoc-en.idx upldoc-en.glo
169 echo "" > ltxdoc.cfg
170 {ja}uplatex upldoc.tex
171 {en}uplatex -jobname=upldoc-en upldoc.tex

```

変更履歴や索引の生成には mendex を用いますが、upL^AT_EX の場合は UTF-8 モードで実行する必要がありますので、-U というオプションを付けます⁶。makeindex コマンドには、このオプションがありません。

```

172 {ja}mendex -U -s gind.ist -d upldoc.dic -o upldoc.ind upldoc.idx
173 {en}mendex -U -s gind.ist -d upldoc.dic -o upldoc-en.ind upldoc-en.idx

```

⁶uplatex コマンドも実際には UTF-8 モードで実行する必要がありますが、デフォルトの内部漢字コードが UTF-8 に設定されているはずですので、-kanji=utf8 を付けなくても処理できると思います。

```

174 <ja>mendex -U -f -s gglo.ist -o upldoc.gls upldoc.glo
175 <en>mendex -U -f -s gglo.ist -o upldoc-en.gls upldoc-en.glo
176 echo "\includeonly{" > ltxdoc.cfg
177 <ja>uplatex upldoc.tex
178 <en>uplatex -jobname=upldoc-en upldoc.tex
179 echo "" > ltxdoc.cfg
180 <ja>uplatex upldoc.tex
181 <en>uplatex -jobname=upldoc-en upldoc.tex
182 # EOT
183 </shprog>

```

C.2 perl スクリプト dstcheck.pl

pL^AT_ΕX 2_ε のものがそのまま使えるので、upL^AT_ΕX 2_ε では省略します。

C.3 DOCSTRIP バッチファイル

付録 C.1 で説明をしたスクリプトを、このファイルから取り出すための DOCSTRIP バッチファイルです。コードは pL^AT_ΕX 2_ε のものと（ファイル名を除き）ほぼ同一なので、説明は割愛します。

```

184 <*Xins>
185 \input docstrip
186 \keepsilent

187 {\catcode'#=12 \gdef\MetaPrefix{## }}

188 \declarepreamble\thispre
189 \endpreamble
190 \usepreamble\thispre

191 \declarepostamble\thispost
192 \endpostamble
193 \usepostamble\thispost

194 \generate{
195   \file{mkpldoc.sh}{\from{uplatex.dtx}{shprog,ja}}
196   \file{mkpldoc-en.sh}{\from{uplatex.dtx}{shprog,en}}
197 }
198 \endbatchfile
199 </Xins>

```

参考文献

- [1] Takuji Tanaka, Up \TeX — Unicode version of p \TeX with CJK extensions
TUGboat issue 34:3, 2013.
(<http://tug.org/TUGboat/tb34-3/tb108tanaka.pdf>)

変更履歴

2011/05/07 v1.0c-u00	へ移動 (based on platex.dtx 2016/08/26 v1.0m)	3
・ p _{La} T _E X 用から up _{La} T _E X 用に修正。 (based on platex.dtx 1997/01/29 v1.0c)	2017/11/29 v1.0q-u01 ・ 英語版ドキュメントを追加 (based on platex.dtx 2017/11/29 v1.0q)	1
2016/05/08 v1.0h-u00	2017/12/05 v1.0s-u01 ・ デフォルト設定ファイルの読み込 みを uplcore.ltx から uplatex.ltx へ移動 (based on platex.dtx 2017/12/05 v1.0s) . .	1
・ ドキュメントから uplpatch.ltx を除外 (based on platex.dtx 2016/05/08 v1.0h)	2017/12/10 v1.0s-u02 ・ uplcore.ltx の前に plcore.ltx を読み込むようにした (最近の p _{La} T _E X が前提)	9
2016/06/06 v1.0k-u01	2018/04/08 v1.0w-u02 ・ 安全のためフォーマット作成時の バナー表示をやめた (based on platex.dtx 2018/04/08 v1.0w) .	1
・ up _{La} T _E X 用にドキュメントを全体 的に改訂		3
2016/06/19 v1.0l-u01		
・ パッチレベルを uplvers.dtx から 取得 (based on platex.dtx 2016/06/19 v1.0l)		9
2016/08/26 v1.0m-u01		
・ uplatex.cfg の読み込みを uplcore.ltx から uplatex.ltx		